

萬葉集略解

十下

柳田文庫

文庫11

A 104

14













右二首柿本朝臣人麻呂之詞集出

真葛原名引秋風吹每阿太乃大野之芽子花散

まぐさのうらわひくあきこのせかくごんあつみのおやめのまぎぶらちの

和名栴大和宇智郡阿陀陀讀可とも、一内の大也、よあるし同、まきの

鴈鳴之来喧牟日及見乍将有此芽子原雨雨勿零根

かりのねのまもろいひまぐみつあゝんこのなきいらふあめなふりそね

以下二首をきい麻呂ありしといはれたるわらとまきていふるがおぬるこ

みく麻のまらば、ちやあつらゝあめれびつといひり

奥山雨住云男鹿之初夜不去妻問芽子之散久惜裳

おくやまふともしらよ志のよしいまじつまじつまきのちちあきそも

細長のみもよふ、おのもよひといく、神衣、ちちれび、こ、ちちの

積おのこもくちちあつらんよしいまじつまじつまきのちちあきそも

麻の葉まらば、ちかよあり

白露乃置卷惜秋芽子乎折耳折而置哉枯

しろつゆのねのまらばちかよあり

第十八橋とよめるもあま、村、松、豆、可、良、之、美、い、つ、る、い、ま、よ、あ、つ、る、合、枯

ちか、し、い、い、ち、あ、よ、ま、さ、れ、枯、ま、と、惜、し、く、か、て、あ、つ、て、枯、ま、ん、の、つ、く

秋田新借廬之宿雨穗經及咲有秋芽子雖見不飽香聞

あきたたののかりほのやぶあけすまぐみけるあきいづみれあゝぬのこも

吾衣摺有者不在高松之野邊行之者芽子之摺類曾

わのころももれるよあゝぬのこもあゝぬのこもあゝぬのこも

あき、い、づ、み、れ、あ、つ、る、こ、も、あ、つ、る、こ、も、あ、つ、る、こ、も、あ、つ、る、こ、も

あ、つ、る、こ、も、あ、つ、る、こ、も、あ、つ、る、こ、も、あ、つ、る、こ、も

あ、つ、る、こ、も、あ、つ、る、こ、も、あ、つ、る、こ、も、あ、つ、る、こ、も

行ノ下之  
ハまゝ誤



まはあつて、せんとぬねば、まきつる衣とせりるるりよもり

此暮秋風吹奴白露雨荒角芽子之明日将咲見

このゆであきのせしむるぬきつゆあつてあきのあきのあきのあ

あきのあきのあきのあきのあきのあきのあきのあきのあきのあ

秋風冷成奴馬並而去来於野行奈芽子花見雨

あきのあきのあきのあきのあきのあきのあきのあきのあきのあ

朝杲朝露負咲雖云暮陰社咲益家禮

あきのあきのあきのあきのあきのあきのあきのあきのあきのあ

あきのあきのあきのあきのあきのあきのあきのあきのあきのあ

あきのあきのあきのあきのあきのあきのあきのあきのあきのあ

あきのあきのあきのあきのあきのあきのあきのあきのあきのあ

あきのあきのあきのあきのあきのあきのあきのあきのあきのあ

春去者霞隱不所見有師秋芽子咲折而将挿頭

はるあきのあきのあきのあきのあきのあきのあきのあきのあ

あきのあきのあきのあきのあきのあきのあきのあきのあきのあ

あきのあきのあ

沙額田乃野邊乃秋芽子時有者今盛有折而将挿頭

あきのあきのあきのあきのあきのあきのあきのあきのあきのあ

事更雨衣者不摺佳人部為咲野之芽子雨丹穗日而将居

あきのあきのあきのあきのあきのあきのあきのあきのあきのあ

あきのあきのあきのあきのあきのあきのあきのあきのあきのあ

あきのあ



之(久)  
誤(見)  
誤(見)

秋風者急之吹来。芽子花。落卷惜三。競竟。

あきせはやくつきてぬらぶを射ちるまをみわきしてらん  
之ハ久の語ちるべし。護竟と四州おぼろしくあわいりつるまを  
せり。菊ハ竟ハ立見の程より。ききしんとして。風ハ護ひくちら  
し。さきとらんといふ。つねに。極ちる。枝ハ。竟ハ。互  
見の語ちる。あきといひて。みんちる。一。秋風のきく。あきとらん  
ゆ。よらんといふ。さき

誤(年)  
誤(年)

我屋前之芽子。若未長。秋風之吹南。時雨將開跡。思乎。

わのやどのをまのうれなる。あきつせのやちらん。あきとらんといふ  
字一本。手も。あきとらん。あきとらん。あきとらん。あきとらん。あきとらん  
人皆者。芽子。字秋云。綴。吾等者。字花之末。字秋跡者。将言  
いふ。あきとらん。あきとらん。あきとらん。あきとらん。あきとらん

万解十下 三

誤(猿)  
誤(猿)

五屋前雨開有秋芽子。常有者。我待人。雨令見。猿物乎。

わのやどのをまのうれなる。あきつせのやちらん。あきとらんといふ  
字一本。手も。あきとらん。あきとらん。あきとらん。あきとらん。あきとらん  
玉粹公之使。乃手折来有。此秋芽子者。雖見不飽。鹿裳  
たまつきのさき。あきつせのやちらん。あきとらん。あきとらん。あきとらん。あきとらん  
香聞

之(下)  
誤(名)

たきそ。あきつせのやちらん。あきとらん。あきとらん。あきとらん。あきとらん  
たき。あきつせのやちらん。あきとらん。あきとらん。あきとらん。あきとらん  
とら。あきつせのやちらん。あきとらん。あきとらん。あきとらん。あきとらん



くさくさいり之の下名ハモのほぐえ唐かろちりもろくくうりせつ  
あくすもろくわきをまじりし

吾屋外雨殖生有秋芽子字誰標刺吾爾不知所

わのやどらあおほしるあきをまよしたれのたぬまよしれよまらるぞ

れいお物よせんよちりあくと物よまらぬやううて人の所よまよ

いたよるまのあまもろくまよのあまよまらぬよまらぬ

手取者袖并丹覆美人部師此白露雨散卷惜

てふれいよてふほよまらるべしあつゆふちらまろくまらる

あつゆふちらまろくまらるべしあつゆふちらまろくまらる

白露雨荒争金丰咲芽子散惜兼雨莫零根

あつゆふちらまろくまらるべしあつゆふちらまろくまらる

あつゆふちらまろくまらるべしあつゆふちらまろくまらる

嫩孀等行相乃速稻字菊時成来下芽子花咲

よめらのゆきあひのりせとあまもろくまよのあまよまらぬよまらぬ

あまもろくまよのあまよまらぬよまらぬ

子孫といふまじり

朝霧之棚引小野之芽子花今哉散濫未馱雨

あまもろくまよのあまよまらぬよまらぬ

あまもろくまよのあまよまらぬよまらぬ

戀之久者形見雨為與登吾背子我殖之秋芽子花咲爾家里

こひくがまよまらるべしあつゆふちらまろくまらる

あまもろくまよのあまよまらぬよまらぬ

秋芽子戀不盡跡雖念思惠也安多良思又将相八方

あまもろくまよのあまよまらぬよまらぬ



































神名火之山下動去水丹川津鳴成秋登將云鳥屋  
かみぢのやまたとまゆくみづまかろつたくなわあきくうんとや

草枕客爾物念吾聞者夕片設而鳴川津可聞  
かまつをたぐのあうてあふゆえ秋くんとやハ竹くうとやのこ

片まけハ河向のまこ

瀬字速見落當知足白浪爾川津鳴奈里朝夕毎  
せんとやあおちんきちんまきくあふまかいつたもああよひごと

まハ倍字まきちんか有こ

上瀬雨河津妻呼暮去者衣手寒三妻將枕跡香

かみつせまかいつるあゆあさればあわがせむしつまつうのしんこ  
晴のうと人のまじりのくまをくうておけてあうこ

詠鳥

妹手字取石池之浪間後鳥音異鳴秋過良之

いもてをとりけのいけのなみのまゆあうねけちちくあきをぎぬら

いづれを枕詞取石池ハ聖武紀ハ行還至和泉国取石頼宮ハあう  
これちんべー、姓氏派ハ取石造和泉国諸蕃の下ハあうとくわあふ

とろまの池とくうとくまの浪の音後の後ハあうとくわあふハ物名  
あうこまのねあけだん

秋野之草花我末鳴百舌鳥音聞盪香片聞吾妹

あきののをがまひくれあまくわすのこあきくうんのかうきくわあふ

わがハ改むと石とまの語くまハ秋まの鳴あうとあうとくわあふ  
あうまひやると宮もハ岸岡ハ岸待の語れといふハあうまも岸岡  
といふまもくまも岸岡ハ岸待の語れといふハあうまも岸岡

百舌鳥



草花と云ふれとよめる、草一は草花と云ふとよめる

詠露

冷芽子丹置白露朝朝珠斗曾見流置白露

あきはぎふれけるちつゆあきはぎなまなたまごみゆるおけるちつゆ

冷ハあまふと云ふ、草十一あまかせと冷風と云ふ

暮立之雨落毎一云打春日野之尾花之上乃白露所念

ゆづものおりするもよかたあのをなまごうへのちつゆおもむゆ

草十二よまむ、一本のゆくもちれぐありくはの夕草花之末乃と云

七一そ並載て、左記は右海二首小鯛王宴居之日取琴登時必先吟

詠此歌也、ミクとも、タマハチハ杖の物とせり、又ゆ

秋芽子之枝毛十尾丹露霜置寒毛時者成雨家類可聞

あきはぎのえびしきをまつゆどもあきはぎむくときちりまらるる

露、秋の草花と云ふ、草一は草花と云ふとよめる

白露與秋芽子者戀亂別事難吾情可聞

ちりつゆともあまのこころいそれれごとかきわのこころおも

あまのこころいそれれごとかきわのこころおも

吾屋戸之麻花押廉置露雨手觸吾妹兒落卷毛将見

わら戸のをばるおちあへおつゆよてたれわきこちちりあくもみむ

わら戸のをばるおちあへおつゆよてたれわきこちちりあくもみむ

白露宇取者可消去来子等露雨争而芽子之遊将為

ちりつゆととらなぬべいそこころいそれれごとかきわのこころおも

あまのこころいそれれごとかきわのこころおも

秋田前借廬宇作吾居者衣手寒露置雨家留

あきつこうのかあちをつくらわのまらるあまのこころいそれれごとかきわのこころおも



和名抄云毛待云農人作廬以便田事和名伊保と云置の下曾の事を脱す  
まうと云うて例もさうな、秋古と集ふに比あて載てつゆと云うる  
とあり

日來之秋風寒芽子之花令散白露置雨來下

このごろのあきのせきしをぎのちちらすまうつゆたきよけし  
秋田蒨若手揺奈利白露者置穂田無跡告雨來良思

一云告雨來良思毋

若之苦の俗字考つ和名坎尔雅注云苦和名編菅茅以覆屋也と云苦子に杭  
手深きものよも同くくは流をよつかりをあらわしつゆと苦と云  
葉のうらむ穂田は穂子出る田に穂田と云やれをくれば葉のまきおさ  
と使はれはるくとまもくと勢つとくとよむくば初くはか風と云

不知きまふりすと菊いれき室を二の向きと云、衣半ワデヒトヌナリ淫念利と云へ  
といふは考べり

詠山

春者毛要夏者緑丹紅之綠色雨所見秋山可聞

はるはかえもつみどりのいれもあめのかきまみゆるあきののやまのし

若葉とよありあは枝の影に丹あまゝ丹にあきとあは無く流るるを  
よここへ松遠るまきりる秋にこころかまふいとよめるはきようれ

詠黄葉

妻隱矢野神山露霜雨爾寶比始散卷惜

つよきもむののみやるつゆわかほひしめしりちらまふくまふ

つよまりの秋月、矢野神山、和名抄出雲神門、八野、伊与喜、多那、矢野



備後甲奴那矢建 搦麿赤穂於八野 予、そいつとをよめりう。

朝露雨染始秋山 雨鐘禮莫零在渡金

あさつゆよそめはめりあきやまふとくれなちうそあわつるかね

あつるかねとあきやまふとくれなちうそあわつるかね

右二首柿本朝臣人麻呂之詞集出

九月乃鐘禮乃雨丹沾通春日之山者色付丹来

この月のまぐれのあめふぬれはかりかすのやまいろつきふけり

まをまといつり法とゆかりハハルあまてはうとつきのえ磨を澄と鐘云

鴈鳴之寒朝開之露有之春日山宇今黄物者

かりのねのさむきあやけのつゆさうかすののやまをさかひまそのを

りかちとつてあは様ゆて海るものるればかみかしのぬきせんまを

この山へいと高といわれれとれ之磨をの洲よりま

比日之曉露丹吾屋前之芽子乃下葉者色付雨家里

このころのあつとまきつゆわがやどのなきのまきとまいてつきふけり

鴈鳴者今者来鳴沼吾待之黄葉早継待者辛苦母

かりのねいままきなるまぬわのまちりもちをやつけまてぶるも

雁の鳴よまきとみづらといそく之雁の下鳴之磨を音云

秋山乎謹人懸勿忘西其黄葉乃所思君

あきやまをゆめむかくなむれれそののみちらバのおやゆらうふ

そいふまよちうくうとるこ秋のものと人のぬまうけくまじも、はれ

うらうまをまひゆらみりうくらくはるとせとるま君ハよの

まをゆらうまをまひゆらみりうくらくはるとせとるま君ハよの

大坂乎吾越来者二上雨黄葉流志具禮零介

おほさかのこをわのこえくれはうらみよみむらもちりるまぐれあつり



大坂ハ葛と取ニよふるを教と流といふ。ちりなき。よとてマ。目。一  
秋去者。置白露。爾吾門乃淺茅。何浦葉色付。爾家里  
あきさるれおくまうつゆよわがのあきもちうは。はいろつまるけや

浦ハ借くすまこ

妹之袖卷来乃山之朝露。爾仁寶布。黄葉之散卷。惜裳

いものそでまきこのやまのあやつゆよにやみむら。のちらまくをうし

妹の袖と枕来といひんてよ。やゆる流お流。笠取の城の心みやと。おんい

中。や。宝布。ハ来乃ハ年久の借く。まきむとと。い。う。打考へー

黄葉之丹穗。日者繁然。鞆妻梨木乎。手折可佐寒

あきさる。の丹穂。日者繁然。鞆妻梨木乎。手折可佐寒

あきさる。の本。まきれ。と。ま。と。し。ろ。を。依。て。つ。も。う。と。研。文。を。わ。ら。う。と

ひ。と。つ。も。鞆。と。り。一。種。を。や。あ。へ。一。梨。ハ。い。よ。く。葉。の。落。つ。と。あ。き。さ

十九とあきさるのさの在。行。も。梨の黄葉を。め。で。て。う。さ。り

露霜聞寒之。秋風爾黄葉。爾来毛妻梨之木者

つゆ。の。霜。も。し。き。ゆ。わ。の。あ。き。の。せ。ま。り。み。ら。し。け。ア。と。つ。ま。わ。う。の。き。は

聞一ハ乃ハ毛を。よ。き。け。の。の。の。ま。う。と

吾門之淺茅色就。吉奥張能浪柴乃野之。黄葉散良新

わががのあきもちいろつくとよまののまき。ののぬの。もみら。いろ

持統紀。幸菟田吉隱とあり。大和守院。院。と。あ。う。ま。は。は。は。あ。し。そ。こ。う。あ

ち。う。と。一

鴈之鳴乎。聞鶴奈倍爾。高松之野上之草。曾色付。爾家畝

か。の。の。ね。を。こ。さ。つ。つ。も。あ。ふ。た。の。ま。の。ぬ。の。へ。の。く。も。ぞ。い。ろ。つ。よ。は。い。ろ

吾背兒我。白細衣。往觸者。應染毛。黄變山可聞

わがせ。の。ま。の。こ。と。う。も。ゆ。き。ふ。れ。は。あ。ら。ひ。ぬ。ぐ。も。を。つ。や。ま。も











真十鏡見名淵山者今日鴨白露置而黄葉將散

まろかこみちがちやまにけつしかもきつゆねさうりみちるるる

まろかこみちがちやまにけつしかもきつゆねさうりみちるるる

吾屋戸之浅紫色付吉魚張之夏身之上雨四具禮零疑

わがやのあそむらいろづくよまばりのあつこのへふまぶれくのも

よまばりのあつこのへふまぶれくのも

鴈鳴之寒鳴後水莖之岡乃葛葉者色付雨来

かりのねのせむむくまきゆみづきのものくもづいろづまよわり

ゆみづきのものくもづいろづまよわり

秋芽子之下葉乃黄葉於花継時過去者後將戀鴨

あきこよのあきこのせむむくまきゆみづきのものくもづいろづまよわり

あきこよのあきこのせむむくまきゆみづきのものくもづいろづまよわり

明日香河黄葉流葛木山之木葉者今之散疑

あすのういそみちがたなづきのあまのこのいまいあちるる

あまのこのいまいあちるる

妹之紐解登結而立田山今許曾黄葉始而有家禮

いもういしむくむむらびてたつあまはまこころそそちらばめくわかれ

いもういしむくむむらびてたつあまはまこころそそちらばめくわかれ

そそちらばめくわかれ

そそちらばめくわかれ

そそちらばめくわかれ

後ノ股上

鴈鳴之喧之後春日有三笠山者色付丹家里

かりのねのなきまゆいよりかよのわのそよのあまのいりてかこころ

あまのいりてかこころ















あまやまのこみはしむいそがねはけさくせはしむいそがねはけ  
そくねいほのそくねいほのそくねいほのそくねいほのそくねいほの  
久々のほろろ

詠芳

高松之此峯迫雨笠立而及盛有秋香乃吉者

たのまのこのみはしむいそがねはけさくせはしむいそがねはけ

峯と迫る雨笠立りて及盛有秋香乃吉者

かきこもちといつし和名抄芸久作香草也とありとる相いりれき

題の芳草の草の語もこれ松草とあるといつし按し和名抄菌茸

注云菌有木菌土菌石菌和名皆多介云く状如人著笠者也と云ぬふし松草ハ秋香と云

わく香しと云ぬふし松草ハ秋香と云ぬふし松草ハ秋香と云ぬふし

詠雨

一日千重敷布我戀妹當為暮零禮見

ひとひはちぢくまわのこもちいそがねはけさくせはしむいそがねはけ

礼所の傍に千重敷布をたいてはしむいそがねはけ

右一首柿本朝臣入麻呂之歌集出

秋田内容乃廬入雨四具禮零我袖沾千人無二

あきたのこみはしむいそがねはけさくせはしむいそがねはけ

あきたのこみはしむいそがねはけさくせはしむいそがねはけ

玉手次不懸時無吾戀此貝禮志零者沾尔毛将行

たまてつぎかたぬとこもちいそがねはけさくせはしむいそがねはけ

たまてつぎかたぬとこもちいそがねはけさくせはしむいそがねはけ

零者  
誤



黄葉乍令落四具禮能零苗雨夜副衣寒一之宿者

そみぢばとちりしきくれのあさちよよきへそまきいふうぬれ

これよりちりあはさしむる長しきうらやまの白く人の宿

後よりさしきまもせむしとらるせむるわがより空をいつらた考へ

詠霜

天飛也鴈之翅乃覆羽之何處漏香霜之零異年

あまもよやかかのつなきのおをいだのいつくわけての志ものちり人

層にあまの羽ちむるけつうなりああるればかくとされくちあ

きぬ旅人の下ちせんゆままあつうはこころに羽ぐめ天の轉むる

ふもよりちり翅之層をよ翅とそとよりほろく翅のさかん

秋相聞

金山古日下鳴鳥音聞何嘆

春冬野見

あきやまのきいひのまてまなうくともこのこゑはよもいふちあふちげん

あきよは秋物何金日下をとももて秋の古日借字をく秋の夜来の妻

古言の落人とまるとおおとつ冠輝考よあははをい何よあれ

も葉がくれるもものひあはるもて輝ふけはまぐさむゆかサの

妹が輝をよまきうせが教まのせとりのり

誰彼我莫問九月露沾乍君待吾

たうわれわれをまといそなうきあつゆめれつちまおつわれと

もぐくたうわれよりかれはたれとまきくくも人のえいづつとこれ

誰れがとるちしりう

秋夜霧發渡風風夢見妹形矣

あきのよのきりしちわしりあやれれいあまがていふあまのあま

風は凡このほろくおほくもあまのあまのあまのあまのあま











根ヲ膝ヒ

色付相秋之露霜莫零根妹之手本乎不纏今夜者  
いろづふあきのつゆもさちそねむらわたりをよめるぬこよひハ  
零の下根のさちをもち一え磨かふよわく物づりもづふハさづくと也  
そへ輝くねむらわたりを神さくねむらわたりもあまのさちをもちつと  
秋向ハあまのさちをもちつと

下雨ハ筒保

秋芽子之上雨置有白露之消鴨死猿戀雨不有者  
あきこゝのく小おさたるさつゆのたのもしさあまのさちをもちつとあまのさちハ  
まハ合目ハさちをもちつと消可思念萬思戀管不有者とちつとハ  
死猿ハ死をもちつとつとあまのさちをもちつと契沖つとつとあまのさちハ  
の下雨ハ筒の保ももちつと

吾屋前秋芽子上置露市白霜吾戀目八面  
わらふのあまのさちのくおさつゆのたのもしさあまのさちをもちつとあまのさちハ

万解十下 サハ

とハのりろろとん席のりハハ物輝きもあれてさびしき

秋穂宇之努爾押靡置露消鴨死益戀不有者  
あきのほるとまぬらわたりつゆのけりもさあまのさちをもちつとあまのさちハ  
秋のハ橋の極もさあまのさちをもちつとあまのさちをもちつと  
信さくとのあまのさちをもちつとあまのさちをもちつと

露霜爾衣袖所沾而今谷毛妹許行名夜者雖深  
つゆもあまのさちをもちつとあまのさちをもちつとあまのさちをもちつと

ゆのれハゆりん

秋芽子之枝毛十尾雨置露之消毒死猿戀不有者  
あきをさちのえびもあまのさちをもちつとあまのさちをもちつとあまのさちをもちつと  
さちハいたるもあまのさちをもちつとあまのさちをもちつとあまのさちをもちつと  
あまのさちをもちつとあまのさちをもちつとあまのさちをもちつと











藤のゆりの色をいそぐれいあふれやもきぢめく我あふは書とひ  
せしうもあふよ人のまれもこきれくくはされるもあふい

寄鶴

鶴は秋のやわらうまれば秋のむせり

今夜乃曉降鳴鶴之念不過戀許増益也

このよりのあふいそくちあつたのにおひいそくちあふいこそくちあふれ  
くちあふいそくちあふいそくちあふいそくちあふいそくちあふい  
やうとて、あふいそくちあふいそくちあふいそくちあふい

寄草

道邊之草花我下之思草今更雨何物可將念

みちのべの草花のそくちあふいそくちあふいそくちあふい  
おひいそくちあふいそくちあふいそくちあふいそくちあふい  
めあふいそくちあふいそくちあふいそくちあふい

ちん、集事何物二字をばに、河を何とよむと、いん、るの原の

寄花

草深三蝶多鳴屋前芽子見公者何時来益牟

くさふのここのちるきさつふあふいそくちあふいそくちあふい  
秋就者水草花乃阿要奴蟹思跡不知直雨不相在者  
あきつげふくさのあふいそくちあふいそくちあふい

秋つげ、秋はあふいそくちあふいそくちあふいそくちあふい  
五月とよむ、阿要奴我尔よりあふいそくちあふいそくちあふい  
の河は改ま、秋はあふいそくちあふいそくちあふいそくちあふい  
すまふいそくちあふいそくちあふいそくちあふい

何為等加君乎將賦秋芽子乃其始花之歡寸物乎

なにあふいそくちあふいそくちあふいそくちあふい







あるは花の三四の句はまよひの心の中の花

吾郷雨今咲花乃女郎花不堪情尚戀二家里

わが郷の雨今咲く花は女郎花の情尚戀ふ二家里

空を今もくは秋の空を今もくは秋の空を今もくは秋の空

新集のころはとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつ

をほりて花をさると之をさると娘都四まゆ

芽子花咲有宇見者君不相真毛久二成来鴨

なごこの花は咲けり有宇見者君不相真毛久二成来鴨

うらむはくはくはくはくはくはくはくはくはくはくはくはく

朝露雨咲酢左乾垂鴨頭草之日斜共可消所念

あさつゆはくはくはくはくはくはくはくはくはくはくはくはく

まよひは進之花の葉とけぬはくはくはくはくはくはくはくはく

花をよみたりとよ妻付も下よめさき夕にけぬる鴨以子のとよめ

花をよみたりとよ妻付も下よめさき夕にけぬる鴨以子のとよめ

あわてしきもつゆささいひたさくはくはくはくはくはくはくはく

長夜半於君戀乍不生者開而落西花有益乎

ながよの半に君を戀ふは生かざる者開き而落し西の花は有益か

いんげんはくはくはくはくはくはくはくはくはくはくはくはく

吾妹児雨相坂山之皮為酢寸穗庭開不出戀渡鴨

わが妹の雨は相坂山の皮を酢寸の穂庭に開き出でず戀を渡す鴨

もよおしき花を枯れぬとよめさき夕にけぬる鴨以子のとよめ

卒雨今毛欲見秋芽之四槎二将有妹之光儀乎

卒と卒  
二保



いそぐふいまいまのあきいづのさきいふあらんいづがさのついで

卒尔開いそぐふいづのあきいづのさきいふあらんいづがさのついで

小舟いそぐふいづのあきいづのさきいふあらんいづがさのついで

用いそぐふいづのあきいづのさきいふあらんいづがさのついで

又まのいそぐふいづのあきいづのさきいふあらんいづがさのついで

秋芽子之花野乃為酢寸穗庭不出吾戀度隱孀波母

あきいづのさきいづのあきいづのさきいふあらんいづがさのついで

花野に地よりあきいづのさきいづのさきいふあらんいづがさのついで

と歎く婦

吾屋戸雨開秋芽子散過而實成及丹於君不相鴨

わがやどいそぐふいづのあきいづのさきいふあらんいづがさのついで

七世のいそぐふいづのあきいづのさきいふあらんいづがさのついで

吾屋前之芽子開一家里不落聞爾早來可見平城里人

わがやどのあきいづのさきいづのあきいづのさきいふあらんいづがさのついで

石走間生有貌花乃花面有来在筒見者

いはのまふおいづのあきいづのさきいふあらんいづがさのついで

いそぐふいづのあきいづのさきいふあらんいづがさのついで

中への容花芽子やみやのせいのついで

妹をさうしておくれといつて花のめづるいづがさのついで

藤原古郷之秋芽子者開而落去寸君待不得而

あきいづのさきいづのあきいづのさきいふあらんいづがさのついで

元明天皇和銅三年高市郡藤原より奈良一郡を遷させたまひ

及於藤原より藤原の居る人のたふらむ人へよみくおくれのついで

秋芽子乎落過沼蛇手拵持雖見不怜君西不有者



































ちりひて入るる

冬相聞

零雪虚空可消 雖戀相依無月經在

あさゆきのそらふくあはれなくあつしをたまふべきをなふけ

あつしをたまふべきをなふけ

沫雪千重零敷 愈為来食永我見徳

あつゆきちうへふちぢけこしりのけさびさくれはみつた

と中重と里は他とちさくととせりえ唐をよまて取まののくハゆを

けさのハよまて取まののくハゆを

右掃本朝臣人麻呂之歌集出

寄露

咲出照梅之下枝置露之可消於妹 愈頃若

あついでいさうめのかしんあつあつゆのたわぶくひりふ

あつあつゆのたわぶくひりふ

あつあつゆのたわぶくひりふ

寄霜

甚毛夜深勿行道 遣之湯小竹之於霜降夜鳥

たまはげもよよけてあつたみちのべのゆをけりふあまのあつよ

ゆをけりふあまのあつよ

あつよ

寄雪

小竹葉雨薄太禮 零覆消名羽鴨 将忘云者 益所念

さのちふはげれあつあつひげまぶらむれんとくはまてあつあ

あつあつひげまぶらむれんとくはまてあつあ



















